

17. バイパスタンプクを活用した肥育素牛の 初期発育改善についての提案

南部振興局生産流通部 企画・流通・畜産班
○塩崎洋一、福吉朋美、岩本純子

1 背景・目的

最近の子牛市場は相場が高値で推移しているが、管内の子牛価格は市場平均に届かない状況が続いているばかりか、子牛価格の推移をみる限り、購買者のニーズに沿った種雄牛の血統を導入しているメリットが十分に活かされていないとも言える。

また、管内でも飼養頭数の多いA農場において、昨年、子牛の発育状況を調査したところ、体高に比べて胸囲の標準偏差（ σ ）が不足している傾向にあったほか、 σ 値での比較では去勢の発育が雌に比べて劣っている傾向が見られた。こうした状況から、給与する濃厚飼料や農場の作業状況なども含めて問題点を検討したところ、

- (1) 母牛の乳量、乳成分が個体ごとに異なる
- (2) 農場の都合により生後数ヶ月間の飼養管理が一定してしない
- (3) 生後2～3ヶ月齢以降は群飼となるため採食量に個体差が発生する

といったことが把握できた。

そこで、こうした飼養環境下において子牛の発育改善を進めるためには、生後100日齢までの子牛にバイパスタンプク質を使用することが有効ではないか考え、現地試験に取り組むことにした。

2 試験方法等

- (1) 対象区は2013年7月～8月に生まれた子牛の調査結果とした。
- (2) 試験区は2014年3月以降に生まれた子牛として、生後100日齢までバイパスタンプク質を1日50～100g（スターター給与量の5～10%範囲）を給与し、定期的に測尺を行うこととした。なお、対象区の離乳時期が冬期であったため、試験区は夏期に向けて離乳する子牛（2014年3月～4月生の子牛）をA区、冬期に向けて離乳する子牛（2014年8月～9月生の子牛）をB区として比較することとした。
- (3) 調査項目として、子牛の生時体重及びその後約1ヶ月ごとの体高、胸囲、体重を測定し、和牛登録協会の計算式により σ 値を算出して比較することとした。

3 期待できる効果及び今後の対策

- (1) 母牛の乳量、乳成分の個体差の補完
- (2) 冬期の寒冷ストレスによる発育不良の改善
- (3) 体高、胸囲、体重のバランスの改善による子牛の商品性向上
- (4) 初乳製剤の使用と併せて普及を図り、地域全体で子牛市場価格の向上を目指す
- (5) 子牛市場出荷後、県内で肥育される試験牛については、超音波診断により肥育期間中の僧帽筋やロース芯形状などの変化を調査し、良好な赤肉が形成されているか否かを検討する